

“竜の眼” — 資料と短信 —

“樹葉信” を求めて

— 雲南旅日記 —

栗田 文子[※]

沖縄結縄から福木葉の話となり、雲南の樹葉信のことを佐野賢治先生より伺い、雲南には必ず結縄があると確信した。

数年前から雲南の結縄をこの眼で確かめたいとかねがね思っていた念願がやっと叶いそう。

東西シルクロードの旅は数回経験しているが、華南の旅は初めてで治安・気候・習慣等一寸と想像がつかないので渡部武先生に伺う。

先生は、服装、持物等に到るまで細々と御注意を下さった。劉剛先生からも中国の諸先生や通訳の紹介・食事・生活等についてキメ細かく御指示をいただく。劉剛先生には帰途の上海空港を発つまでの親身にも及ばぬ御心くばりには有がたく感謝する。

たまたま比較民俗学の先生方が雲南へ行かれるとの事で成田から昆明まで御仲間に入れていただくことになった。

九月八日上海に一泊し九月十日昆明で御別れする迄普段伺うことの出来ないお話や、雲南民族学院・社会科学院の御紹介をいただき、先生方との楽しい一刻であった。

十日麗江に発たれる先生方をお見送りし、劉先生紹介の政府外事部副部長の范さんと徳宏行の打合せをする。翌日通訳の袁さんを紹介して下さい。

十三日迄民族学院・社会科学院の先生方・景頗族のお二人の金先生をお訪ねし、結縄・樹葉信のこと、徳宏の景頗族についてお話を伺う。これからは一人旅になると思うと気持ちが引締る。

九月十四日雲南省の最西端、半島のように

突き出た地域、徳宏タイ族・景頗族自治州のある州都、芒市へ。ここは潞西縣の政庁もあり、州内唯一の空の玄関である。

空港には景頗語の話せる赴さんが運転手と共に迎えに来ていた。

直ちに芒市を出発中緬公路を瑞麗に向う。夕方迄に宿につければよいので時間がある。途中畹町に廻る。畹町は往年日本軍がビルマからこの町を通って更に芒市へ進んだ処である。中緬公路の中国側の最終点で瑞麗江の支流畹町河を挟んでミャンマーの九益市と国境を接している。瑞麗江はベンガル湾に注ぐイラワジ河の上流である。

「昔からシルクロードを旅する人はこの町で休み、明日の旅立をしていったのです」と赴さんが話す。河には畹町九谷橋が架り橋の両側には両国の検問所がある。町と検問所はすぐ隣り合せて監視員が数人居り、橋の袂には国境の標識が立っている。土地の人達は橋を渡り国境を越えて往来している。監視員は町の人とのどかに話をして国境の感じはない。

赴さんは橋を渡ってもよいが、外国人はパスポートが要る由、間違いがあるといけなから橋の手前で撮影だけにする。町は傣族が主に住んでいるとのこと（写真）。

町を出て瑞麗に向う。途中麗江の流れが見える。水は濁っている。



※日本民俗学会・日本民具学会員

道の両側に傣族の高床式の住居が点々と見られる「この辺りは台風が来ないので建物等も竹と茅葺で造られているのです。これから瑞麗までに傣族の家が沢山見られます」と説明する。

車に乗った時から気になっている。天井からラメ入りの水色の布で七・八畳位の四角の包みが吊され美しい房が下り絶えずゆらゆらゆれている。尋ねると、本当は中に香が入っている香袋とのこと。これには薫りは感じられないが、袋の話をしてくれた。

傣族の女性が作るもので四月十二日頃から十日間位水掛祭りがある。祭りの時意中の男性に投げ、相手が受け取ると恋が叶うとの事。

赴さんの手首に赤い紐が二重に巻かれている。日本でも魔除け、呪(マジナイ)に首や手、足首に糸を巻く習慣が古くからあるが、尋ねる。赤い紐は相思の人同志が同じ様に手首に巻くとの事。

更に進むと段々畑が見られ、榕樹が多い。

傣族の弁材の住居が見られ、壁が美しい模様にもまれている。景頗族は西山区に居るとか、車は畑の続く公路をとる。今回行く景頗族の処は西山である山ですと畑のはるか遠くの山を指す。車の中でいろいろ話を聞いている裡に瑞麗の町に入る。六時すぎ人民路に面している永昌大酒店に着く、道路を隔ててすぐ前は郵便局、立派な建物である。宿は四階建てでディスコ・カラオケ等がある。三階の部屋はゆったりしているが中国の通例で水まわりはよくない。

シャワーを浴びるまでには天井にある水タンクにスイッチを入れて40分、湯が沸いた処で浴びるのである。中国旅行でもこの方法は初めてである。

古びた宿であるが、この辺りでは一応高級ホテルである。もう一つの面倒なことは階段の処にスタッフが居て階下に行く時には食堂・フロントに用事でも必ず部屋の鍵を渡すことである。

雲南の食事は辛いから成るべく辛味を少く注文するよう劉先生より教えられたが、昆明でも、ここの夕食も余り辛くない、魚と菜食が主で、肉も脂肪が少く味も薄味である。赴さんが一人唐辛しとネギ・生姜の入ったものを煉り合せ御飯にかけて食べている。袁さんが止めたが少し口に入れてみた。とても辛くて食べられない。私達の食事は袁さんが特注している感がする。

瑞麗の辺りには日本の納豆と同じような食物のあることを知り、話すと、注文してくれた。日本の糸引納豆と同じで小粒である。ネギを小口切りに、生姜辛子が混ぜ合せてある。辛いが味はよい。粥食によく合う。日本と何れがルーツなのか？この感じは翌日からの調査の中に幾度か経験し、少数民族の人達の世界に益々興味が出て来たことである。

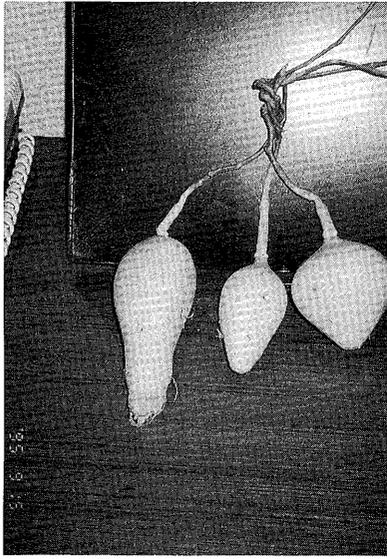
明日の打合せをして夜の街に出かける。

ミャンマーに突き出た国境の町、瑞麗県の中心の町は少数民族の他に印度・パキスタン人等国境を越えた向こうの人々も見られ、マーケット街は延々と続いて賑っている。ミャンマー・タイの食品、印度・パキスタン人の店には宝石、アクセサリ、タバコ(洋モク)等が多く見られる。南方の果実・野菜も露店に出ている。袁さんが土瓜と云う野菜？を求めた。形は三寸人参のミニチュアである。店に戻って皮をむいて食べる。ページュ色の薄い甘味のある大根に近い味のもので余り美味いとは思えないが水分が多く珍しい食物であった(写真参照)。

袁さんは不要と云ったが、明日から尋ねる時の準備も兼ねて菓子等数種類求め、夜店に並んでいた瓜子二種と蓮子を求める。

九月十五日朝八時食事を済ませ直ちに出発、放送局の木然干さんを探ねるが午前中は留守とのことで傣族の集落へ先に行くことにする。

中緬道路から農道に入り暫く走る。二毛作とはこの様なことかと知った。刈り取られる田と、青々した稲田が見られるのも面白い。



こんもりとした森が見えて来た。近づくと
傣族特有の建物が点々と見られ、学校もある。

傣族の集落である。更に行くと寺院が現れた。
修理中なのか周囲に足場が組まれている。

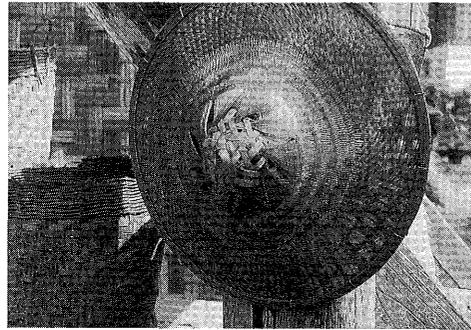
靴を脱いで階段を昇る。正面に金色の大きな
仏像がまつられてある。礼拝していると住職
が来られてあいさつをする。名刺を見ると
肩書が沢山ある。中国と雲南省の仏教協会の
副会長で徳宏州と瑞麗市の仏教協会長と四つ
の肩書を持っている。

寺が古くなったので修理しているとの事、
子供の僧が数人学校？から帰って来た。老僧
の用事をまめまめしくは始める。躰は仲々厳
しい。子供達は素直に働いている。

菓子、煙草をすすめられる。二人は煙草に
火をつけ一服するが直ぐ喫するのをやめた。
何でと聞くととても喫めないとの事、私は一
本記念にいただいて家まで持帰る。強い香で
ある。室の向にガラス張りの献金箱がある。
心ばかり投げ入れると老僧からいねいな礼
を云はれ恥かしくなる。寺は喊撒仏寺・住職
は伍并亜・温撒と云う、温和な方であった。

集落の中を歩く、樹葉信に用いられる植物
を探す。赴さんが見つけると袁さんと二人で

採るのでその前に急いで撮る。数種類を本の
間に挟んでおく。赴さんが小さな木の実を採
り、これは「緬桃尖」と云って腹痛の薬でよ
く効くとのこと。一軒の民家の竹床の柱に平
常用いているのであろう。古びた傘がかけ
てある。作りが見事であったので主^(あるじ)に話すと、
あげてもよいが使い古したもので失礼だから
と店を教えてくれた。主が家の中に招じてく
れたので暫く腰かけていろいろ話を聞く。傣
語で数の教え方と字を書いて教えてくれる。
漢字以前の文字？日本にも漢字以前の古代文
字があったであろうと思いつつながら主に別れを
告げる。



午後放送局に何うと木然干さんは待って
て下さった。景頗族のことは十年前の調査
で忘れたこともあるが、と厚いノートを持
って話される。結縄については判らないかと、
樹葉信と織物の模様について話して下さる。

戦の知らせ、人の死を知らせる、敵を襲う時、
留守を恋人に伝える方法等々。

然し、樹葉信では永く記録に残らぬので何
か方法は？と何う。(金先生がお祖父様から聞
いた話は刀の刃を欠いて大切な記録を残すとの
事であった) 木然干さんは織物にして記録
する事を話して下さる。刀の刃の話は出て来
なかった。織物の記録の模様は十九種を説明
して下さる。興味深い話が次々と出て来る。

又、斎瓦を尋ねた時、家の入口の卓の上に
置いてある品物で面会の応否を現すとか、又

産室の魔除けの呪い等は日本のそれとよく似ている。ルーツは？と思はれる程である。熱心に話して下さるのでつい興にのって夕方近く迄お邪魔してしまう。時間をもっともっとほしい。

店に戻り食事迄の時間赴さんから景頗族の話聞く。彼は小学校からの景頗族の友人がいて時々泊りに行き彼等の生活を見・聞きした事を、瓜子をつまみながら話がはずむ、罪を犯した時の賠償の方法等は興味深い。

一例として鶏一羽盗むと、鶏の頭・体・肉内臓・骨・足の部分になぞらえて鋤・衣服・珠子・環・毬子・土鍋を鶏の持主に賠償する。

牛一頭の盗みの場合は屋外の時と、牛小屋の中から盗ったのでは賠償の量は大変に異なる。又、人を誤殺した時は人体各部になぞらえて、それぞれ賠償品が細々と定められ頭・髪・眼耳・鼻・歯と首から上だけでも大変である。身体・手足・内臓・骨に到る迄その品目と数量は鶏の比ではない。(詳細は略す)

賠償の時は必ず董薩の役の人が立会う決りで、只渡すのではない。社会鍋の様に三又に組んで吊した鉄の大鍋に第三者が一つ一つ入れてから渡すのである。立合った時の状況等も興味深いものがある。賠償が終ると恩讐を越えて元通り仲よくするとの事。次々と話が尽きない。夕食の時間がまたたく間に来てしまった。

これから採集する樹葉の事を話すと赴さんがよく知っていたので安心した。

夕食後又町に出る。マーケット通りを歩きながら店屋の中をのぞくと、僚族の腰に下げた籠がある。竹組みも模様も作りが見事である。聞けば店の飾りに置いてあるという、話して譲ってもらう。袁さんが荷物が増えますよ、と云う。明日は早立ちなので店に戻り早寝する。

夜中篠つく雨の音に目が覚める。五時頃迄土砂降り、今日はダメかとあきらめの気持ちでいると六時すぎ止んだ。どうぞ晴れますよう

に祈る。

九月十六日朝食を済ませ七時出発、今夜は芒市泊りになるので荷物をすべて車に積み込む。

空ははっきりしないが予報では雨は降らない様子一応ホッとす。

街を出て暫く中緬公路を走り途中横道に入る。道巾は広いが舗装していない、処々石畳があるガタガタ道である。夕べの雨でぬかるみが多い。「これから道が悪くなりひどく揺れますから気分が悪くなったら云って下さい」と云う、田舎の凸凹道には馴れているから大丈夫と思うが、然し山路に入ると坂が多く昇り下りが烈しく天井に頭がぶつかりそうになる。

公路とちがいの両側の樹々は生い繁り、枝が空を覆っている。田舎道にしては道巾がある。「これは昔の中緬公路で樹が多いので軍隊は空から見つからないようにこの道を通ったのです。日本の軍隊も通ったのです」と赴さんが話す。インパール作戦の事である。でも当時は今の公道がないのでは、この道しかなかったのでは……五十年前の戦時中の重苦しい気持ちが一瞬頭の中を過ぎる。

九時四十分車を止めた。峠で見晴がよい。ここは見晴がよいから景色を撮った方がよい、と云う。途中美しい山脈を撮っていたので車を止めてくれたのであろう。弄坎山とか、

瑞麗県から既に潞西県に入っていた。暫くするとなだらかな道になり姐勒金塔が見えてきた(写真)。車を止めて休む。この近くでは一番大きな仏塔とか、塔の門は閉っている。向い側に一軒家があり、焼牛干巴を作っていた。

作業場に入り暫く見学する。総て手作業で随分時間のかかる食品である。

脂質の少い生牛肉を厚さ五糎位巾七・八糎長さ三十糎近くに切り炭火で炙りながら焦げないように焼き、塩分の強い液に香辛料と唐辛子が入っている汁に漬け、再び炙り之れを三回くり返し、肉に糸を通して吊るし干し固

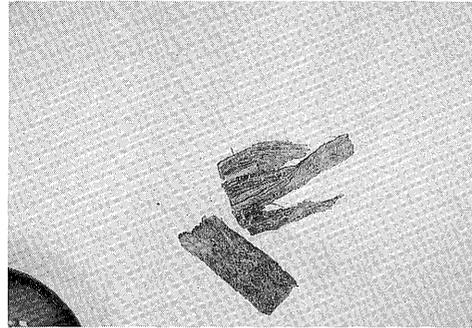
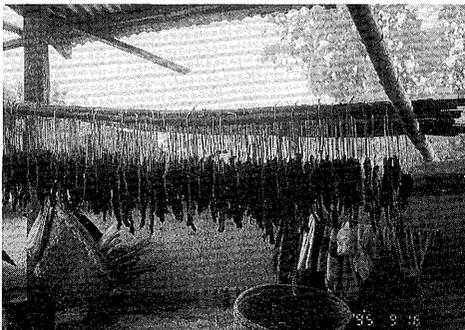


める。出来上るまで数日かかる。干巴は朽木の繊維の固まり感があり肉には見えない。口に入れると乾いたジャッキーの様で相当辛い。味はそれほどではないが貯蔵食品としては最適である。

これは他では手に入らぬからと皆買求める。

私も少量を求めて肉を裂いてみると繊維が糸の様にきれいに裂ける。肉の表面は白く塩が咲いている。これも粥飯に入れたらよいと思う。まだ試してない(写真)。

更に車を走らせる。上の方から男性が一人下りて来る。荷物を持って山路を歩く。人の一生と重ねて思いながら見送る。



「も少し行くと街に入ります。その先には何もありませんから、時間が早いけれどそこで昼食をとります」とのこと。十時三十分、三台山の麓・遮放鎮に着く。景頗族の集落でこの辺りはよい米がとれるので清朝時代は献米をしたとのこと。店に入る。通りからまる見えの土間に丸卓を囲んでの食事、傍らの籠で注文した菜を作って運んで来る。飯粒は艶々と光って確かに美味しい。時間が早いので食欲はないと思ったのに珍らしくお代りをした。

食事中、店の主に酒を一升ビンで用意させる。白酒の度の強い酒である。

食後、町の店屋で煙草を求める。赴さんが求める煙草は仲々ない。数軒探して手に入る。景頗族の人達への土産で彼等の好物とのこと、特に酒は日常生活に欠かせないとか、好みを心得て品を選んで求めたのである。

中緬旧道を更に走るが夜来の雨で道路はぬかるみが多く、到々車が泥沼の中に動かなくなった。苦心してどうやら泥沼から後退させて抜け出したがとても前には進めない。もう十二時近い。今日は戻るより他はないと思った処、三人が道路脇の林の中に入り葉の付いた木の枝を運んでぬかるみの上に敷きはじめた。何回も運んで盛り上げる程になる。上に乗って沈めている。その上を車を走らす。しっかり掴まっていないと投げ出されてしまう。こんな事を繰り返して三台山に着く。

三台山は三つの峠を持つ山で昇りつめた処

に三台山卿政府がある。レンガ作りのしっかりした建物でここの李勅用さんに面会する。

用件を話す。結縄のことは話してもらえなかったが樹葉を用いて包結が行われていることに驚いた。然も私達と同じ方法で吉凶の約束事まで決められ同じ様である。又樹葉信にも用いられているのである。

悪事を犯した時の罪科の話になる。罪人の家の牛、豚は村人が話し合っ殺して食べてもよいことになっているとか、これが罰として科されている。

階級により罰に差がある。高い階級の人達の場合には罰は重く農民の倍とか、農民の科料は牛・馬・布等である。沖縄のそれと比べながら聞く。景頗族には体罰はない。再犯で弁償の物がなく出来ない場合には村八分になり相手にされぬ。村に物織りの老人が居るのでと案内して下さる。暫く坂を下ると家が見えて来た。

古歌にある「引よせて結べば柴の庵なり、」竹を結び合せただけの中から表がすけて見える老夫婦の住居である。床は四十糎位上っている。三部屋と土間で外から見ると案外広い、土間の壁側には大小の刀のサヤ籠が幾つ

も下っている。カメラを向けると刀を中に入れてくれた。

主人は73才奥さんは82才とのこと。この辺りでは有名人で若い頃はビルマにも居たことがある。外国のこともよく知っている。知識が豊富で頭がよい。生まれて来る子供の性別・人数迄も見分けることが出来、^{マジナイ}呪も出来ると李さんが話してくれる。

樹葉信は27才頃まで用いたと詳しい。特に恋人との樹葉信についてはいろいろな話が出る。

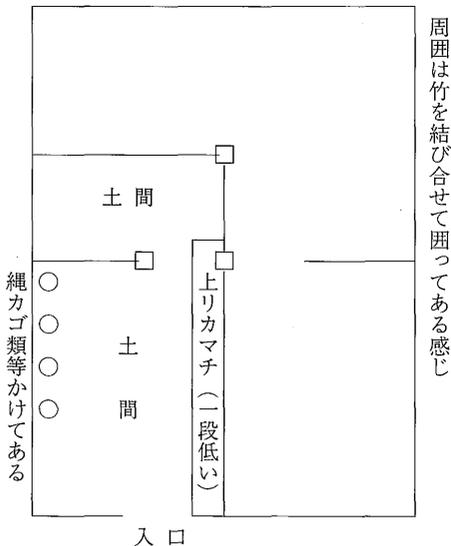
女性は白い布又は色の縞模様の布を友人に托して男性に贈る。布を送る点では沖縄にもこれに似たことがある。

葉の裏・表の用い方、合せ方による意味・包む葉の選び方、男性から女性に渡す樹葉信の中身と包み方・紐の種類と話をしている裡に村の人が次々と集まり家の中に入って腰かけたりしゃがんで喋り出す。土産の酒は飯碗で水でも飲む様な飲み方で女性も美味しそうに楽しく飲んでいる。李さんの話では、未婚の女性は飲酒することは恥とされている。子供を二人生んでから飲みはじめる人もあるが女子は飲まない人が多いとか。

米の収穫が済み、新米を初めて食する時には順序がある。必ず第一番に犬、第二には牛、第三に老人か目上の人、最後に一般の人が食する。犬が吠えて米が天から降って来て米が作られるようになった。水牛が水田を耕してくれるので米が出来たので感謝の気持ちを表してそれから人間が食べるのですと話される。

聞いている裡に暖かいものが身の中を流れるような気がした。これが済むと皆で歌を唱い、不幸や凶事が来ないように祈る。稲作文化の共通したもの、我國の行事と比べてしまう。

子供が転んだ時の呪いの言葉等次々と話はずむ、時刻は四時近い、これから樹葉を採集するのでと記念の写真を撮って皆に渡す、皆と握手して別れる。見えなくなる迄、手を



振っている。

山路の途中で車を止め、樹葉信に用いる植物を採る。この辺りには種類が多い。

道端の草路傍の木の葉等、手の届かぬ崖の上等は三人が木や崖によじ登って採る。カメラは無理と思ったが、私の代りに二台のカメラを持って三人が撮ってくれる。この辺りに見当たらないものは明日採りましょうと云う。

五時三十分約二十種類近く採ることが出来た。男三人の力である。袁さんは自分の宝物のように注意深くまとめて取ってくれる。

これから芒市まで直行する。車窓から見る樹々は照葉樹と亜熱帯の植物が混り家の周囲や街路樹等に珍らしいものが見られる。雲南は植物の種類が豊富である事を感じる。

中緬公路に入ると道巾は広く道路もよいので快適に走る。飛行場の前を過ぎ街中に入る。

店舎は人民路の東方賓館で古い建物ではあるがカチッとした格式のあるものを感じた。

ホール、食堂も広く天井が高く食堂にはシャンデリアが下っている。宴会場にもなる。

室の感じもよい。然し相変わらず水廻りがよくないがバスルームは広く植物の整理がし易い。食事前に樹葉を洗い整理の準備をする。

明日は芒市を発つので食後ささやかなお別れ会をする。お二人様と運転手さん本当に本当に御苦労さまでした。三人が興味を持って楽しく協力してくれたので思いがけないものまで見つけることが出来ました。本当に私の手足となって働いて下さったこといつまでも忘れません。赴さんは何時も合掌してあいさつする人で若いのに感心な人である。よい人達に出会って幸せな旅であった事に感謝する。

足りない樹葉を明日届けると云うが飛行機の時間もあるので無理しない様に云う。

九月十七日朝七時頃赴さんが数種類の樹葉を届けて下さる。今朝採って来たとの事。早速整理する。

夜遅くまで灯がついていましたが、疲れますから無理しないで下さい、と袁さんに注意

される。時々うるさいと思うこともあるが、彼は通訳だけでなく私の健康管理・食生活・雑用等帰国の日まで家族に対する様な気くばりをしてくれる。聞けば私と同年令の病弱なお父さんが居られるとか、それで…とうなづける。

朝食後街に出る。今日は芒市で五日に一度開かれるマーケット、通りは人があふれ少数民族の人達も多勢出て来て民族色豊かな衣裳が見られ彼女達の持物の中に基本型の結びを見つける。何気なく用いられているのである。

各民族が日用品・食物等売っている。まだ手に入らなかった植物が売られているので栴柎・瓜尖・辣椒を求め、傣族の弁当籠を求めてそれに入れる。柳を苞に包んで売られている。これ等も日本で昔売られていた姿でありいろいろな共通点があって外国とは思えないタイムトンネルにのって過去に戻った様なつかしさを感じた。昆明へのお土産を求めて食事を済ませ空港へ、空港で記念の写真を撮り二人にお礼を云い別れを告げる。

赴さんから記念にと傣族のピンク色の香袋と、「お守りですから何時も身につけて下さい」とヒスイの仏像のペンダントを贈られる。

若いのによく気がつく、感謝感激である。これは家庭環境か、幼い時からの躰が身につけているのか、数日の生活ではあったが合掌の心を日常生活の中で教えられた。

空から見た徳宏の山続きの処々に段々畑が見える。さようなら徳宏 又会える日まで。

三時三十五分昆明空港に着く。九日に着いた時には空気がきれいだと思ったが、徳宏の山の空気とは矢張り異なる。山の空気は本当に美味しかった。

日本より二、三日前に帰国された劉先生と、范さんに店より電話で帰国したことを報告する。お二人が夕方訪ねて下さり無事を喜んで下さる。

翌日お世話になった両学院の先生方に御礼の御あいさつを済ませ、翌一日は雑用を片付

ける。

九月廿日昼昆明空港を発つ、劉先生と袁さんが空港まで送って下さる、最後まですっかりお世話になる。

彙報

◇比較民俗研究会報告

- 第44回 1995. 10. 4
曾紅
「中国雲南省ハニ族の“ホスザ”と日本の“初穂祭”」
- 第45回 1995. 12. 6
島村恭則
「韓国の都市伝説—韓日比較の視点から—」
- 第46回 1996. 1. 31
前川啓治
「文化と文明の連続性—国際化と翻訳的適応—」

◇白庚勝（中国社会科学院少数民族文学研究所副研究員）来室

- 1995. 11. 3～1996. 1. 28



95/11/20 山形県飯豊町における
聞き書き調査

今回の旅は出発から帰国まで皆様の暖いお心に包まれ、数多くの菩薩にお会い出来た心の旅でもあった。いつまでもいつまでも忘れられないよい旅であった。

- 日本学術振興会論博事業の研究者として昨年に引き続き「納西族のカラーシンボリズムの民俗学的研究」をテーマに来室。

◇西南中国民俗調査団訪中・来日調査

- 1995. 9. 8～30, 1995. 11. 18～28
- 平成7年度科学研究費国際学術研究『漢族と周辺諸民族における民俗宗教の比較研究』の調査実施（本文、下写真参照、本号の印刷経費の一部には当科学研究費を充てています）

◇比較文化学類比較民俗学集中講義

- 1996. 1. 9～11
- 渡辺欣雄東京都立大学人文学部教授
- 「東アジアにおける沖縄文化」



95/11/21 飯豊町における中国文化講演会